

基肄城築造1350年

基肄城を知る⑨

―万葉集に出てくる道、『城の山道』―



城の山道は、はつきりとしたルートでの確定はできてはおりませんが、基肄城東側の山腹を越えて大宰府に向かう道だと思われま。古代の官人や防人、そして民が行き交う古代の道であつたと推定されます。

我が国に現存する最古の歌集『万葉集』にも、この城の山道が詠われています。

今よりは 城の山道は

寂しけむ

我が通はむと 思ひしものを

【訳】これからは、大宰府に通う際の城の山道は寂しくなることでしょう。私は貴方にお目にかかるのを楽しみに通い続けようと思つていましたのに。(巻第四)

作者は、大宰府の役人で筑後

守(筑後の長官格)の任務に就いていた葛井連大成です。交友のあつた大宰帥(大宰府の長官)の同伴旅人が任期を終え、奈良の都に帰った730年(天平2年)にその寂しさを詠んだものです。

葛井連大成は朝鮮の百済系の渡来人です。城の山道から基肄城の土塁や建物が見えるならば、そこを通るたびに、663年の白村江の戦いの後に、同郷百済の人々の力を借りて造られた朝鮮式山城、基肄城に故郷の風景を重ね合わせて歩いたのではないかと、このひとつの歌から想像が膨らみます。

万葉集の中には、基肄城に登つて詠われた歌もあります。

ほととぎす 来鳴き響もす

卯の花の

判にや来しと 問はましものを

【訳】ほととぎすがこの山に飛び交い、盛んに鳴きだしている。(もしも大伴郎女が生きていらつしやる時なら) 仲良しの卯の花と共にやつて来たのかとたずねただろうに。(巻第八)

作者は式部大輔石上堅魚朝臣です。式部大輔とは、

礼儀礼式や文官の勤務評定などを司る役所、式部省の次官です。この歌の註に神龜五年(728年)大宰帥大伴旅人卿の妻大伴郎女、病に遇ひて長逝す。時に勅使式部大輔石上堅魚朝臣を大宰府に遣して、喪を弔ひ、併せて物を賜ふ。その事既に畢りて、駅使と府の諸卿大夫等と、共に記夷城に登りて望遊する

日、すなはちこの歌を作る。とあります。朝廷より大伴旅人の妻の弔問に訪れた堅魚が、大伴旅人や他の役人たちと基肄城に登り、妻を亡くして悲しんでいる旅人を気遣つて詠んだ歌と分かります。

この歌に旅人は、

橘の花散る里の ほととぎす
片恋しつ 鳴く日しぞ多き

【訳】橘の花が散る里のほととぎすは、散つてしまふ花を恋しく思つて、幾日も鳴きつづけて

います。(巻第八)

と、石上堅魚の気遣いに対して、妻を失つた気持ちを歌で返しています。

これらの歌から、奈良の都から来た客人を基肄城に案内したことが分かり、築造から約60年経つた頃の基肄城の風景も垣間見ることのできる気がします。初夏の頃、真っ白な卯の花が咲き、山の彼方此方から聞こえてくるほととぎすの声。眼下に広がる山野。その彼方には整備された大宰府の都が見えたかもしれません。また、大宰府から気軽に來ることができると、城の山道が整備されていたことも分かります。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



大宰府政庁跡(都府楼跡)から南に基肄城が見える(最も高く平らになっている部分が基山山頂)